

## 子育てにおける地域の役割

安 富 俊 雄

はじめに

現在、子どもは危機に直面している。子どもを取り巻く社会環境は以前にも増して大きく変化している。

かつて、わが国では、子どもは地域の「宝物」として大切に育てられた。子どもは地域とともにあったといっても過言ではない。換言すれば、子どもは家庭と地域がうまく連携しながら育ててきたのである。そして、近代になると学校（大人では職場）も加わり、家庭と学校と地域がうまく連携しながら高度経済成長期まで安定的に地域社会が運営されてきた。

ところが、現代社会では、これら3領域がそれぞれ十分に機能しなくなってきている。特に子どもは家庭と学校の関係はそれぞれ強まったが、地域とのかかわりが極めて希薄になっている。しかしこれは何も子どもにかぎらず大人にとっても同様である。その結果、今日生じた社会の諸問題をみると、子どもにかぎらず大人にとっても地域の存在が希薄になったことに起因する問題が多々ある。もし、かつてのように地域社会が円滑に運営されていれば、生じなかつただろうと思われることがしばしばあるのである。

そこで、子どもに焦点をあてながら、希薄になりつつある地域の存在をもう一度見直し、よりよき子育てで環境づくりに必要な地域の復活・再生を考えてみたい。

### Ⅰ 子どもは地域で育てられてきた——歴史をふり振り返りながら

もう忘れられてしまったが、わが国では、子どもは「7つ前は神の内」といわれた。つまり、7歳までは生存が不安定であり、子どもの魂はあの世とこの世をさまよっているとされてきた。そして、7歳を過ぎるとやっとこの世の一人として認められた。その証拠に”七五三”といった儀式で、三歳、五歳、七歳の節目、節目に子どもの成長を祝し、地域でお祝いしてきた。これが、今日では地域ではなく各家庭で継承されている。

子どもと地域の関わりは、わが国では地域にもよるだろうが、およそ母親の胎内に命が宿ったときからはじまった。つまり女性が妊娠すると、お腹の子どもが安全に成長するために「帯祝い」と称してお腹を帯で巻いた。そして、それを地域の人たちが集まりお祝した。出産後も乳親、名づけ親などを近所の人にその役を求め、出産30日後に初宮参り、満1歳の初誕生日にも近所、親戚とお祝いをするなど、子どもは地域の「宝物」として大切に育てられた。

7歳を過ぎると、この世の一員とみなされ、さまざまな役割をになった。男子は大切な労働力として家業を手伝い、女子は子守奉公に出されることもあった。また7歳になると、子どもは地域の「子ども組」に組み入れられ、時には合宿をしながら地域の一員としての自覚を先輩（13、14歳の子ども頭）から教えられ、時には地域の祭礼や年中行事の手伝いなどをした。子ども組は15歳以上の「青年組」に入るまでの期間で、13、14歳の年長者が取り仕切った。子ども組の特色としては、現在の子ども会のように親の管理下にある組織ではなく、親の干渉を受けない自治組織であったため、親や大人の介入がなか

ったことである。ここで子どもたちは社会の一員としての第一歩を歩みだしたのである。ここに今日の子どもの大きな違いを見ることができる。

15歳になると、今度は地域の青年組に入り、今度は地域の一人前の大人としての自覚と役割を教えられた。そして地域の一員としてその役割を担いつつ成長していった。

以上のように、かつては子どもから青年、そして一人前の大人まで地域の一員として育てられ、同時にその年代にあった役割を果たしてきた。このように、かつての地域の組織はタテ割になっており、各年齢層の年長者が下のものを育てる組織が形成されていたことがわかる。一昔前、ガキ大将を頂点とする遊び集団が存在したことを懐かしむ声が今でも聞かれるが、この遊び集団はある意味子ども組の名残であろう。しかし残念ながら、今日では、かつてのような子ども組も残存していないし、遊び集団もガキ大将（年長者）を中心とする異年齢集団から同学年集団に変容し、地域との関わりもほとんどなくなってしまっているのが実状である。これでは、かつてのように集団化することによって社会化された人を育てることは困難である。

## II 今日の子どもを取り巻く状況

明治期にはじまった近代化による経済成長は戦後の高度経済成長によって頂点に達した。そして、わが国を世界有数の経済大国に押し上げていった。「豊かな国、日本」の到来である。しかしながら、経済発展はもたらしたが、これまで長く続いてきた伝統的な社会形態は大きく変化した。つまり、農業国であったわが国が明治期以降の近代化による工業化のために都市化が急速に進み、地方から都市部への人口移動（労働力）が顕著になった。そして地方の青年層が都市へ流出した。さらに伝統的な三世代家族から核家族化が進み、これまで長く続いてきた伝統的な行事や習慣（しきたり）の継承が困難になった。このような状況は当然のごとく子ども組織にも影響を与えた。先にも述べたように、子どもを地域で育てるといった伝統は徐々に希薄になっていった。その例が今日の子ども会の衰退であろう。

子ども会は、地域の青少年の健全な育成を目指して、就学前3年の幼児から高校生までを対象にして、子ども集団とその集団と集団を支える大人の集団によって構成されている。活動としては異年齢の集団による集団活動を目指しているが、その実態は幼・小学生が中心で、中学生や高校生はあまり関わりを持っていない。具体的な活動としては、スポーツ大会や廃品回収、地域行事のお手伝いといったボランティア活動が主だったものである。子ども会は子どもが関わる地域団体としてはわが国最大の団体で、平成16年10月現在で121,370の子ども会、人数は4,397,886人が登録されている。

ちなみに、下関市の状況をみると、昭和期になって人口の増加とともに子ども会も徐々に増加をし、昭和61年には小学校校区が30に広がり408の会を数えるまでになったが、以後年々減少し、平成19年には27校区183の会まで減少してしまった。これらを組織する会員数も昭和61年の幼・小含めて23,000人から平成19年には5,100人余りに減少した。

社会変化のなか子ども会の減少要因として、人口減少の問題も大きな問題点であるが、女性の社会進出により、地域活動を望まない大人や団体活動を好まない子どもの増加が考えられる。つまり、地域の交流を積極的にしようという風潮が薄らいできている。

子どもを地域とのつながりで見ると、子ども会が大きな架け橋になって子ども会を通して高齢者や地域の行事に関わりをもち、それらを通じて地域の一員としての自覚と認知が

されていたように思う。しかし残念ながら、こうしたつながりは徐々になくなり、子どもたちの多くは地域と無縁になりつつあるのが実状である。

ところがこうした状況は何も子ども組織だけではない。大人の組織も同様である。そんな中、かろうじて高齢者の組織が活発な活動をしていることを付記しておきたい。

では現在、子どもたちは地域との関わりが消失し、もう一度地域を再生することは困難かというところでもないように思う。よくよく注意して地域をみると、伝統的な祭礼が残存している所やスポーツ少年団活動がさかんな所では地域とのつながりがしっかりとできている。また近年ではボランティア活動もさかんになり、これらの活動に子どもが協力している地域も存在するのである。しかし、地域再生のためには、かつての子ども組のような子どもによる自治能力を養成することは地域組織上困難になっており、大人の協力が必要と思われる。

### Ⅲ 子育てにおける地域の役割

将来展望がもてない時代を迎えている中で、大人たちは懸命に働き子どもを育てている。そして稼いだお金も子どもの将来のための教育投資に費やしている。かつてのように子どもの教育の一端を地域にゆだねることなく、学校や塾などの学習組織にゆだね安堵している。そしてまた、親たちは子どもの将来のために懸命に働くのである。繰り返しになるが、戦後、わが国の親たちはしつけをはじめ家庭教育を放棄し、それを学校に依存した。今日では知的学力の向上のため塾に価値を見出し、そのために親たちは懸命に働いている。それは父親に限らず、母親までもそのような状況である。これではゆとりを持って子どもに対応できるはずがない。子育てに自信のない親たちは、それを学習専門集団にゆだねるのである。子どもは学校と塾と家庭の往復である。このままでは血の通った子どもたちを育てるのは困難である。では今後精神的にも肉体的にも健康な子どもは育てられないのだろうか。もう一度、かつてのように地域を活用することはできないものだろうか。

一方、今日では高齢化社会を迎え、社会の一線を退いた人たちが、「第二の人生」として自己の夢を実現しようと思ひ思ひの活動をおこなっている。同時に、それらの人たちは社会に貢献したいという強い要望をもっている。その意味では、彼らはこれからの地域社会再生の大きなパワーになってくれる人たちである。おりしも団塊の世代の大量退職が取りざたされている昨今、これらの熟年パワーはきっと大きな戦力になってくれるに違いない。かつて、わが国の社会は年配者（長老）を頂点として集落の秩序が保たれていた。そこにもどれとはいわないが、年配者は人生の先輩であり、多様な経験を積んでいる。その先輩らの力をもっと活用できるはずである。

現在、地域で必要とされる子育て支援、ボランティア、スポーツ活動、伝統文化の継承等いずれも、これら熟年の経験と知恵を必要としている。同時にこれら熟年者による指導を地域の子どもたちが享受できれば一石二鳥ではなかろうか。分断された地域の生活者の連携を保つことこそ今後の地域社会の活性と再生が可能である。人と人、学校・家庭・地域の3つが連携しないかぎり、よき地域社会は形成されない。

子どもの成長を考えると、今日ほど地域の役割が大きい時代はない。子どもを始め大人たちも度重なる事件から人間不信に陥り、萎縮した生活が続く現代社会に未来はない。こうした閉塞状況を解決するためには、地域によって多様な経験をしながら育てられた団塊の世代の活力が必要である。

最後に地域の再生こそが今日の子育て環境を整備するのに最も重要であることを強調

しておきたい。

引用・参考文献

下関市子ども会連合会「下関市子ども会報告」 平成19年  
森山茂樹ほか『日本子ども史』 平凡社 2002年  
江馬成也『子どもの民俗社会学』 南窓社 1994年  
小山静子『子どもたちの近代』 吉川弘文堂 2002年

本稿は、昨年11月17日の子ども未来会議第3分科会で発表しものに若干加筆したものである。